

# ビターズウィート・サンバ（前編）

吉澤 稔雄



トランペットの軽快なメロディーが鳴り響いて目が覚めた。時計を見ると、ちょうど午前一時だった。ラジオを聴きながら本を読んでいるうちに、いつの間にか眠り込んでしまったらしかった。

啓司はイヤフォンを耳から外し、ラジオのスイッチを切った。読みかけの三島由紀夫の『奔馬』を閉じたら、思わず欠伸が出た。一先ず眠ろうと思った。

翌日は国立二期校の二次試験の結果発表日だった。しかし、啓司には自分が合格しているという自信はまったくなかった。準備不足は明らかだった。一次試験は得意な英語一科目だけだったので何とか受かったが、二次試験の理科や数学では半分も解答できなかったのだ。これでは受かるはずはなかった。浪人はほぼ確定したようなものだった。

うちには私立大学に行かせてやれるほどの余裕はないと両親からは言われていた。啓司自身も自分の家が裕福ではないことは充分承知していた。兄や姉も大学に進学していなかったし、いとこたちの中にも大学に行った者な

どはいなかった。つまり、大学に行きたいなどと言いついたのは、親戚中でも啓司が初めてだったのだ。

戦争を挟んだ過酷な時代を生きてきた両親はともに尋常高等小学校の高等科までしか出ておらず、貧しい日々の暮らしの中で汲々とするばかりで、子供たちの教育にはほとんど関心もなく、将来必要となるであろう学費にも無頓着であった。だから、私立大学に行かせてやるほどの余裕はないというのは本当だった。それでも息子がどうしても大学に行きたいというのなら、親としては無下に反対することもできず、国立か公立なら行かせてやるかもしれないと言いついたのである。

そこで啓司は止む無く都立大学及び国立一期校と二期校の三校を受験した。理数系の教科が得意でない啓司には不利な入試だった。しかも啓司の志望する学科の定員はせいぜい五名か十名とごく僅かだったから、なおさら合格の可能性は低いと言えた。

もし不合格だとしたら、この先どうしたらよいか。啓司は漠然とした不安の中で考えた。大学に行きたいという思いは揺ぎ無かったから、とりあえずは浪人するしかなかったが、果たして両親がそれを許してくれるかどうか

わからなかった。例えそれを許してくれたとしても、予備校に行かせてくれるとも思えなかった。浪人して自宅に引き籠り、ひたすら独学に励んだところで苦手な理数系の科目をどうにかできるようなになるとも思えず、受験校を国立に限られれば再び同じ轍を踏むことになるだろう。

来年また受験するとしたら、私立大学を狙うしかないと言いついた。私大の文系学部の入試なら英語・国語・社会の三教科で事足りた。これら文系の三教科での勝負なら、啓司にも充分勝算はあった。

しかし、来年は私立大学を狙うとして、その場合、入学金や一年分の授業料をどうするか。親を当てにできないとしたら、自分でその分を稼ぐしかないのか。だが、どうやって……。思考はそこで止まった。

啓司は椅子から立ち上がると電気スタンドの灯りを消し、寝床に潜り込んだ。

翌朝、啓司は目覚めると早々に着替えをして、朝食も摂らずに家を出た。近所のバス停に向かう途中で再びショルダー・バッグの中に受験票があることを確認した。足取りは重かった。

バスで王子駅に出て、そこから都電に乗り換え、西ヶ原四丁目まで下りた。狭い住宅地の道を辿って行くと言いついた大学はあった。

工場のようなコンクリート製の簡素な門を抜けて構内に入ると、正面の植え込みの脇に合格発表の掲示板が設置されており、その前には受験生と思しき同年代の若者たちが群がっていた。

啓司はショルダー・バッグから受験票を取り出して受験番号を確認すると、掲示板の前に立ち自分の番号を探した。何度も何度も掲示板を見た。だが、自分の番号はなかった。

やっぱりだめだったか……。突きつけられたその厳しい現実を受け入れるしかなかった。啓司は思わず天を仰ぎ、茫漠とした未来を想像してみた。まだ十八歳。この先チャンスはいくらでもあるはずだと思つた。これを契機として、また新しい道も拓けてくるに違いない。啓司はそう思つて大学の構内を後にした。

一先ず王子駅に戻るつもりで大学の裏手にまわり、そのまま飛鳥山の方に通じる狭い道を歩いて行つた。そして一里塚の交差点を渡って飛鳥山公園を抜け、王子駅前に出たところで啓司は公衆電話を探し、高校の担任教師に試験結果を報告した。

「啓司よ、くよくよするな。君はまだ若いんだから、次があるさ。次に賭けよう」

担任の遠藤先生はそう言つて失意のどん底にあつた啓司を慰めてくれた。そして、話があるからすぐに学校に来るようにと言つた。否も応もなかつた。

言われるままに啓司は王子から国電に乗り、浅草橋にある自身の通う高校へと向かつた。

浅草橋駅から高校までは徒歩で七、八分の距離だつた。モルタル壁や板壁に格子窓のある下町風の古い小さな民家や商家の建ち並ぶ通り慣れた道筋を歩いて行くと、直に高校の庭の一面に植えられた丈高い大銀杏の木が見えてきた。

正門を抜けるとすぐ右手に校舎の入口があり、啓司は中に入ると上履きに履き替えて二階の職員室へと向かつた。この職員室を啓司たちの反戦グループがバリケード封鎖したのはつい五ヶ月ほど前のことだつた。

職員室では白衣を纏つた遠藤先生が待ち構えていた。啓司の二年次と三年次の担任で、担当教科は数学。四十代前半、瘦せぎすで浅黒く、いかにも神経質そうな容貌の教師で、黒縁眼鏡の奥の鋭い眼光を放つその目で睨まれると、生徒たちは皆思はず緊張したものである。

「おい、啓司よ、元気出せよ！」

先生は啓司の華奢な肩をがっしりと掴み、白い歯を見せて笑いながら言つた。

「あ、はい」

啓司は頭を掻きながら申し訳なさそうに応えた。

それから遠藤先生と啓司は職員室の隣にある校長室に移動した。校長は不在だつた。

校長室に入ると、遠藤先生はソファアームに腰を下ろし、啓司にも向かい側のソファアームに座るように言つた。そして背広の内ポケットからハイライトの青い箱を取り出すと、中から一本取り出して口に啜えた。

「君はほんとに語学じゃなくて文学をやりたいんだらう？」

先生はそう言つて煙草に火を点け、煙をうまそうに吸い込んだ。

「そうです。フランス文学。フランス語はそのための方便に過ぎないですから」

啓司は応えた。

「フランス文学か。バルザック、スタンダール、ヴェルレーヌ、ランボー、いいね。しかし、そのフランス文学を学びたいなら、君は仏文科のある私立大学を目指すべきじゃないのか？」

「実は僕もそう思っています。でも……」

「何だ、学費のことを心配しているのか？」

「はい。うちには私立に通わせる余裕はないつて、両親が言うもんですから」

「うん、事情は君のお母さんから聞いているよ、三者面談の時にね。しかしね、金なんか無けりや稼げばいいのさ。私もアルバイトで稼いで自力で大学に入つて、そして卒業したんだ」

「アルバイト……ですか」

「そう。そこで、相談なんだが……」

取り敢えず就職して一年間だけ働いてみないかと先生は言うのだった。

「君の実力からすれば、私大の文系学部なら受かつていたはずだ。だから、この先浪人しても予備校になど行く必要はないと私は思っている。その代わりに働いて金を稼げばいい。どうだ、啓司よ？」

実は紹介したい会社があるのだと先生は言つた。台東区三筋町にある小さな会社で、カメラの付属品を製造販売しているという。先生の自宅近くに住む知人で公認会計士をしている人がいて、その会社の顧問を務めているのと。その知人を通じて既に下話ができていたというのだった。そして先方の会社の方でも是非とも採用したいとの意向を示してくれているという。

「まあ、その会社に入る入らないは君自身が決めることだがね。君が入社したいと言えば、話はすぐにでも決まる」

先生はそう言って二本目の煙草に火を点けた。

「そうそう、肝心な話をしておこう。雇用条件についてだが……」

先生はそれから啓司がそこで働く上での雇用条件について話し始めた。

まず雇用期間については期限なしであること。即ち正社員として入社し、社会保険に加入する。正社員だから、夏冬のボーナスも支給される。月給は三万二千円。通勤手当は定期代の実費を別途支給。但し、啓司が来春に大学受験を控えた受験生であることから、残業及び休日出勤は原則させないこと。また、大学への入学が決まった場合、その後適当な時機に退職することの了解は得ているとのことであった。

「月給が三万二千円なら、手取りは二万九千円くらいかな。これで一年働けば、入学金や初年度の授業料分くらいは充分貯められるだろう。どうだ、啓司よ、働いてみる気はあるか？」

突然の話だったので、啓司は戸惑った。しかし、それはけつして悪い話ではないように思われた。いや、むしろ渡りに船の都合な話だと

さえ思えてきた。いずれにしても、私立大学に行くとなれば、学費は自分で用意しなければならぬ。そのためには働くしかないと啓司は意を決した。

「先生、働くことにします」

啓司は背筋をスツと伸ばしてそう応えた。

「そうか、それじゃこれから面接に行こう」

「えっ、これからですか？」

「そうだよ。善は急げというからな」

そう言うと先生はニヤリと笑いながら白衣のポケットから手帳を取り出し、立ち上がって校長の机の方に向かった。机上の電話の受話器を取り上げると、手帳に書かれた番号を確認しながらダイアルをまわした。

電話口での簡単なやり取りの後、先生はよろしくお願いいたしますと言いながら先方の見えない相手に深々と頭を下げた。

「よし、オーケーだ。社長さんが会ってくれるそうさ。どんな会社か見ておきたいから、私も一緒に行くよ」

「有難うございます」

啓司はソファから立ち上がり、ピヨコンと頭を下げた。

出かける支度を整えると、遠藤先生と啓司は連れ立って学校を後にした。

「会社は鳥越神社の先なんだ。近いから歩いて行くよ」

正門を出たところで、先生はそう言って右手の左衛門橋通りの方に向かって歩き始めた。

左衛門橋通りから蔵前橋通りに出たところで右に折れ、鳥越神社を通り過ぎてから今度は左に進む。この道筋は啓司もよく知っていた。そのまま進んで春日通りに入る手前に台東図書館があるのだ。啓司はその図書館には何度も足を運んでいた。

「啓司よ、ひとつだけ君に言っておきたいことがあるんだが……」

会社へ向かう途中、先生は歩きながら言った。

「はい、何でしょうか？」

「うん。会社に入ったら、政治活動からは一切身を退くんぞ。左翼的な言動は厳に慎むことだ。いいかね？」

真顔で先生がそう言うから、啓司は笑いが込み上げてくるのを抑えられなかった。

「先生、僕は共産主義者でも社会主義者でもないですよ。それほど馬鹿ではないし、傲慢でもないつもりです。左翼思想なんて野蠻人の宗教みたいなもんで、結局はソ連や中国のような赤色帝国主義の独裁体制しか生み出しません。今はもう運動にも関心はもっていませんよ」

啓司はそう言うとニヤリと笑った。

「そうか。それならいいんだが……」

目の前に車の行き交う広い通りが見えてきた。春日通りだった。その一本手前の細い道を右に入り、しばらく行くと、古びた木造モルタルの民家に挟まれてコンクリート三階建ての小さなビルがあった。その入口のガラスの引き戸には「株式会社佐野商会」の切文字が貼られていた。

遠藤先生はガラス戸を開けると、中にいた青い事務服の女の人に声をかけ、案内を乞うた。間もなく事務所の奥から社長と思しき大柄な老人が現れた。遠藤先生はその老人に挨拶をすると、早々に学校に戻って行った。

面接はごく短時間で済んだ。特に試験のようなものではなく、その時点では履歴書も用意していなかったもので、応対に出てきた創業社長の佐野氏が啓司の身上に関わる事柄を聞き出しただけだった。

七十代と思われる佐野社長は大柄で堂々たる体躯の持ち主だったが、話しぶりからは温和で人の好きそうな人物のように啓司には思われた。

簡単な面接の後、佐野社長はすぐ近くの工場に啓司を案内した。一階の事務所奥の階段を上がって二階に行くと、広い板敷の作業場があり、二列に並んだ長い作業台では十人余りの女たちがブローアー・ブラシの検品作業をしていた。帰り際に佐野社長は、是非ともうちで働いてくださいと言って軽く頭を下げた。それで決まりだった。

その日、啓司は帰宅すると、まずは母に、そして父が仕事から帰ってくると父に、就職することになったと報告した。二人ともそのことに異存はなかった。

翌日、啓司は学校に電話して遠藤先生に礼を述べ、次いで佐野商会に電話で入社を意思を伝えた。

こうして啓司の新しい人生が始まったのだ。

四月一日。初出勤の日が来た。

富沢啓司は、国電の御徒町駅前から厩橋行き都電に乗ろうとして、春日通りの中程の路面より一段高くなっている停留所の島に立った時、行列の五人ほど前に並んでいた若い女の後ろ姿に思わず目を留めた。スラリとした細身の

身体に栗色の髪という外見から、何となくエキゾチックな印象を受けた。ほどなくして彼女が一瞬だけ振り返ったとき、啓司はその彫りの深い白い横顔を見て不意に何かに撃たれたような気がした。

やがて広小路の方から都電がのんびりと走ってきて停留所に停まった。都電に乗り込むと、啓司は吊り革に掴まって物珍しそうに車窓からゆっくりと流れて行く街の風景を眺めていた。啓司の頭の中では、昨夜寝る直前に聞いたラジオの深夜放送のオープンング・テーマである「ベクター・スウィート・サンバ」の旋律が流れていた。

都電が元浅草三丁目の交差点に差し掛かると、蔵造りの黒く古めかしい店舗が見えてきた。その瓦屋根には白地に大きな赤い字で「ぢ」一文字の大看板。ここを過ぎると、次が三筋二丁目の停留所だった。

啓司は三筋二丁目まで都電を下りた。そして交差点の横断歩道を歩いていると、先ほど御徒町駅前で見かけた栗色の髪の女が数メートル先を歩いているのに気がついた。女は横断歩道を渡り切ると右手に進路を取った。その女を追うようにして啓司も右に曲がった。

女が二つ目の角を左に曲がったとき、啓司は

「あれっ？」と思った。さらにその女が佐野商会の工場の前で立ち停まったのを見て、再び「あれっ？」と思った。

啓司はすぐに女に追いついた。シトラス系の爽やかな香りが漂ってきた。

「おはようございます」

不意に振り返ると、彼女はそう挨拶して啓司に微笑みかけた。身長割に小顔で、大きな目が悪戯っ子のそのように輝いていた。遠目には大人びて見えたが、近くで見ると年は自分とそれほど違わないのかもしれないと啓司は思った。

「おはようございます」

啓司はどきまぎして顔を赤らめながらそう返すのが精一杯で、後の言葉を続けることができなかつた。

「富沢さんでしょ？」

「はい、富沢啓司です。よろしく願います」

「社長からお聞きしています。私は森静香。よろしくね」

そう言って彼女は事務所のドアを開けた。中に入ると階段脇に設置されているタイム・レコーダーの所に案内して、啓司にカードに打刻するように指示をした。

啓司は言われるままに自分の名前の書かれ

たカードをラックから取り出すと、それをタイム・レコーダーの挿入口に入れ、ガチャンと押した。生まれて初めて触れたタイム・レコーダーだった。不意に植木等の〈ドント節〉の一節が脳裏に蘇ってきた。

タイム・カードの打刻が済むと、静香は啓司を二階の作業場に案内して、製造課の伊藤課長に引き合わせた。そして、彼女自身は一階の事務所に下りて行った。

挨拶を済ませると、伊藤課長は作業場の奥の八畳ほどの和室に啓司を案内した。部屋の西側の壁にはスチール製のロッカーが並んでおり、どうやらそこが更衣室らしいと知れた。伊藤課長は右端の細長い扉を開けると、中から灰色の作業着のジャンパーを取り出して啓司に渡した。

啓司は上着だけ着替え、それまで着ていたジャケットとシヨルダー・バッグをロッカーにした。作業着のジャンパーは痩せっぽちの啓司には少し大きかった。

「富沢君、うちは女性の多い職場です。君はモテそうだから、誘惑も多いかもしれません。特に若いおねえさんたちにはくれぐれも注意してくださいね」

伊藤課長は細い目をしばたかかせて、生真面

目な顔でそう言った。啓司は、伊藤課長の言葉の真意を測りかねて、ただ「はい」と応えるしかなかった。

やがて八時半になり、始業のチャイムが鳴って朝礼が始まった。

二階の作業場に集まったのは製造課の総員十四名。確かに大半が女性だったが、若いおねえさんは少なかった。

係長の佐野さんが司会を務め、最初に啓司を皆に紹介して、それからその日の製造予定を伝達した。朝礼は五分ほどで終了し、皆はすぐに作業に取り掛かった。

啓司は、佐野係長の指導を受け、ブローアの検品とその先端にブラシを取り付ける作業を担当することになった。簡単な、そして単調な仕事だった。

しばらくすると、佐野係長が作業場の隅に置かれていたトランジスター・ラジオのスウィッチを入れた。スピーカーから〈黒ネコのタンゴ〉を歌う幼い皆川おさむの声が流れてきた。

作業台に向かって作業を続ける女たちは時折お喋りに興じた。手を休めることがなければ、特に私語は問題にならないらしかつた。和やかな職場だった。

そこで啓司は、作業台のすぐ左隣に座ってい



た五十歳くらいのおばさんに、佐野係長と佐野社長との関係について尋ねてみた。そのおばさんによれば、係長は社長の甥っ子なのだという。ついでに、常務が社長の長男で、営業部長は次男なのだという。おばさんは教えてくれた。つまり、従業員が三十名ほどのこの小さな会社には、「佐野」を名乗る人物が四人もいるわけだ。だから、社員同士の間では、営業部長はその名から「富雄さん」、佐野係長は久志という名から「キュウちゃん」と呼ばれているという話だった。

啓司が職場に馴染むにはそれほど時間はかからなかった。手先は器用な方だったし、仕事も確実に速かったから、すぐに打ち解けて仲間として受け入れてもらえた。

こうして啓司の入社第一日目はあつという間に過ぎていった。

啓司は森静香のことが気になってしかたがなかった。彼女が日本人離れのした整った容貌の小顔の美人であることは別に、これまでに見知った女の子とは明らかにタイプの異なる個性をもっているようで、そこに啓司は心惹かれたのかもしれない。

毎日出勤時に一階の事務所にいる静香の顔を見るだけで、啓司は胸が高鳴るのを覚えた。仕事でも、家に帰って勉強机に向かっている時も、しばしば静香のことを思い浮かべた。実に久々に感じる高揚感だった。しかし、人見知りな性格から、自分から積極的にチャンスをついて話しかけるようなことはできなかった。だから、あれこれ静香のことを恣意的に想像していくうちに、啓司の中ではそれが却って静香への思いを募らせていく結果となった。啓司はひたすらチャンスが訪れるのを待った。

そして、そのチャンスは思いの外早くやって来た。

佐野商会に入社して一週間ほどが過ぎたある日のこと、啓司が三階の倉庫の隅で昼食の弁当を食べていると、そこへ思いがけず森静香がやって来たのである。啓司は世界史の参考書を読みながら食べていたので、食べ終えるのに時間がかかっていた。

「あら、こんなところで食べていたの？」

人気がないガランとした倉庫内に明るい声が響いた。床に直に座っていた啓司が見上げると、歯ブラシを持った静香が微笑を浮かべて立っていた。昼食後、歯磨きを済ませた直後だったのだろう。

「やあ……」

啓司は少し照れながら微笑みを返した。

「富沢君は毎日お弁当持参なの？」

「そう、母さんがつくってくれるから」

「そうか……。ねえ、今度さ、一緒に外に食べに行かない？」

唐突な誘いで、啓司はちよつと驚いた。

「うん、いいかも……」

少し間をおいてから、啓司はあまり気乗りの

しないような返事をしたが、内心では小躍りし

たいような気持ちだった。

「それじゃ、明日はどう？」

「オーケーです」

啓司は晴れやかに笑って敬礼の仕草をした。

「富沢君、約束よ」

静香はそう言って小指を立てた右の手を差し出した。啓司が立ち上がって躊躇いがちにその細い小指に自分の小指を絡ませると、静香はぎゅつと指に力を込めてきて、繋いだ手を軽く振った。啓司は何だか魔法をかけられたような気がした。

「じゃあ、明日ね」

静香は開いた右手を胸元で小さく振ると、華やかな笑みを残して倉庫奥の女子更衣室に消えて行った。後には爽やかなシトラスの淡い香

りが残った。

翌日、昼のチャイムが鳴って、啓司が二階の作業場から一階の事務所に下りていくと、静香は自分の机の前に座って待っていた。啓司が目配せして外に出ると、それを追うようにして静香が事務所から出て来た。

事務所前の道路に立ち、啓司が周囲を見渡しているとき、静香はスツと右手に向かって歩き出した。啓司は慌てて静香の後を追った。

「三國軒に行きましょう」

歩きながら静香が言った。

「三國軒って、何屋さん？」

啓司は尋ねた。並んで歩いていると、時折二人の肩が軽く触れ合った。

「洋食屋さん。ビーフシチューがおいしいのよ。カレーもいいわね」

「その店、よく行くの？」

「たまあにね。だって、外食はやっぱ高くつくでしょ？ 普段はあたしもお弁当よ」

鳥越神社の方に向かって百メートル余り行った所に三國軒があった。

ドアを開けて中に入ると、香ばしいカレーの匂いが店内に満ちていた。二人は窓際のテーブル

席に向かい合って座った。

「あたし、カツライスにする。富沢君は？」

静香はメニューも見ずに言うと、啓司に注文を促した。啓司も同じものを頼むことにした。

「ここはね、うちの会社の人があまり来ないのよ。それで今日はここにしましたの」

そう言うとき静香は何かを企んでいるかのようになり、啓司の顔をまじまじと見つめた。啓司が恥ずかしさに堪えかねて下を向くと、静香はそれを見て笑い出した。

「そうまじまじと見ないでくれよ」

「あらあ、照れてるの？」

「だって、恥ずかしいじゃないか」

啓司は目の前の静香をおかしな子だなど思った。

「ねえ、富沢君、あたしいくつに見える？」

不意にそう問われて、啓司は少し考えた。自分といくらも年は違わないようにも思えたが、化粧がその判断を迷わせた。

「あたしね、昭和二十六年生まれなの。富沢君と同じよ。でも、早生まれだから、学年はひとつ上ね」

「そうか、年上なんだ」

「違う！ 同い年よ。ただ学年がひとつ上なだけって言ったでしょ」

静香は向きになって否定した。

「わかった。それじゃあ先輩ということ……」

不満そうな静香の表情を見て、啓司は咄嗟にそう取り繕った。静香は一瞬間をしかめて啓司の方を見たが、直にその顔には微笑みが戻った。ほどなくして豚カツとライスの皿がテーブルに運ばれてきた。

食事中も静香はよく喋った。

日暮りに住んでいること、家は駅近くで駄菓子問屋を営んでいること、一人っ子で昨年度内の商業高校を卒業して大手の食品会社に就職したこと、そしてその食品会社を五ヶ月で辞めてその後すぐに佐野商会に勤めるようになったこと等々、静香は食事の手を休めることなく話し続けた。

「あたし、ちよつと食べすぎたみたい。これ食べない？」

一頻り喋ったところで、静香は一切だけ残った豚カツの皿を啓司に差し出した。啓司は割り箸でその一切れをつまむと、そのままパクツと口の中に入れた。その様子を見て静香は「子どもみたい」と言い、声を立てて笑った。

久々の楽しい食事だったと啓司は思った。

「今日はありがとう。とても楽しかった」  
店を出たところで啓司は言った。



「あたしも、楽しかったあ。またそのうち何処かへ食事にでも行きましょうね」

会社の方に向かって歩きながら、静香は言った。

「うん、いいですよ」

そう応えながら、啓司は静香が自分を受け入れてくれたことを理解した。

幸せな気分になりつつ、二人はしばらく肩を並べて歩いた。そして一つ目の角に差し掛かったところで、静香は急に何かを思い出したように立ち止まって啓司の名を呼んだ。

「啓司くん、ねえ、先に行ってくれる？ あたし、少し遅れて帰るから」

「うん、わかった」

啓司は少し考えて、それは二人で一緒に帰るところを他の社員に見られたくないという配慮からだろうと推察した。

啓司が歩き出してすぐに後ろを振り返ると、静香は手を振りながら右手の狭い路地に消えて行った。

啓司は再び会社に向かって歩き出した。歩きながら、偶然とはいえ人生にはこんな展開もあるのだなと思ひ、込み上げてくる歓喜に胸がいっぱいになった。大学に落ちたからこそ会社勤めをするようになり、こうした出会いもあった。

だとすれば、人生もなかなか捨てたものではないかと啓司には思えてきた。

この日を境に、啓司と静香との間は急速に深まって行った。

夕暮れの春日通りを啓司は御徒町の方に向かって歩いていった。都電の定期券は持っていたが、勤めの帰りは駅まで歩いて行くのが好きだった。

日暮れ時の歩道には家路を急ぐ人々の流れが絶えなかった。元浅草三丁目の交差点に差し掛かり、右手にヒサヤ大黒堂の看板を見ながら歩いていると、後ろから都電が来て駅の方に走って行った。その直後、背後から啓司を呼ぶ声がした。

「啓司くん、待ってよお」

振り返ると静香が小走りで近づいて来た。

「都電に乗っていたらさ、歩道に啓司くんの姿が見えたから、あたし、途中で降りちゃった」

一瞬間を疎めて照れ笑いを浮かべながら静香は言った。そして、一緒に帰りましょうと言うから、啓司は頷き、静香に寄り添って歩き出した。

「啓司くんは都電に乗らないの？」

歩きながら静香が尋ねた。

「うん、朝は乗って来るけど、帰りは駅まで歩くことにしてる。夕暮れ時の街を歩くのが好きなんだ」

「そう、あたしも。夕暮れの街っていいわよね」  
すかさず啓司は小声で歌い出した。

「待ちあーわせて、あーるく銀座あ」

すると、静香がそれを受けて次のフレーズを継いだ。

「灯ともーし頃、こーいの銀座あ」

二人は顔を見合わせて笑った。

小島町を過ぎ、清洲橋通りを渡って佐竹商店街に差し掛かったところで、静香が急に啓司の左腕を掴んで言った。

「啓司くん、ちよつとコーヒーでも飲んで行かない？」

「うん、いいよ」

「ちよつとコーヒーを飲むだけね。何だかこのまま帰るのが勿体ないような気がして……」

「大丈夫だよ」

二人は左手に折れて、長いアーケードの続く商店街へと入って行った。

「ねえ、腕を組んでもいいかしら？」

静香が少し甘えたような声で言った。啓司が無言で左腕の肘を差し出すと、静香はその腕に

そつと自分の右腕を絡ませてきた。

こんな風に異性の友だちと腕を組んで歩くのは、啓司にとつては初めての経験だった。ひどく緊張はしたが、少しばかり誇らしくも感じた。啓司はまた静香に魔法をかけられたような気になった。

二人は夢見心地で商店街の道を歩いて行った。長い商店街で、種々の個人商店が道の両側にびっしりと建ち並んでいた。夕暮れ時の商店街は多くの買い物客で賑わっていた。

啓司と静香は、商店街の中程で小洒落た小さな喫茶店を見つけ、そこでコーヒーを飲みながら小一時間ほど他愛のない会話を楽しんだ。時間はあつと言う間に過ぎていった。

この日以来、啓司と静香はしばしば一緒に帰るようになった。しかし、定時にいつも二人一緒に退出するのはまずいだろうという話になり、啓司が先に退出して、すぐ近くの台東図書館の前で静香を待つことにした。二人が付き合っていることは、なるべく内緒にしておいた方がよいだろうと話し合った結果だった。だから勤務時間中は社内で顔を合わせても極力親し気な素振りは見せないよう二人は努めた。

夕暮れ時の図書館の前で啓司が待っていると、静香はいつも小走りでやって来た。

「シズちゃん、そんなに急いで来なくても大丈夫だよ」

啓司はそう言ったことがあるが、静香はその後もやっぱり小走りでやって来た。

「あたし、人を待たせるのは嫌なのよ」  
静香は笑ってそう言っていた。

図書館前で落ち合った後、大抵は御徒町駅まで歩き、そこから電車に乗って日暮里駅まで行くだけだった。そして時々寄り道をして、昭和通り角のバツタ屋に立ち寄りたり、アメ横を散歩したり、広小路まで出て松坂屋に行ったりした。夜の帳が下りて、煌びやかな灯りを放つ店々の連なる華やかな街を二人で歩くのは楽しかった。

しかし、ただ野放図に遊び惚けていたわけではなかった。会社帰りの寄り道は一時間ほどと静香は決めていたらしく、午後六時半頃になると静香はいつもさり気なく啓司に帰宅を促した。それは啓司が受験生であることを気遣っていることだろうと思われた。だから、啓司も静香の言葉には素直に従った。

そうして電車に乗り、日暮里まで行く。電車がスピードを落として日暮里駅のホームに入

ると、啓司はそつと静香の手を取って軽く握りしめる。静香がそれに応えて啓司の手を握り返す。いつの間にかそれが二人の間での別れ際の慣わしになっていた。そして、電車が止まってドアが開くと、静香はホームに下り立ち、別れを惜しむかのように手を振って、改札口へと通じる古びた薄暗い階段をゆっくり上って行くのだった。

佐野商会で取り扱っていたのは、レリーズ、ブラケット、グリップ、レンズ・フード、ネットワーク・チェーン、プロアー・ブラシなどのカメラまわりの種々の付属品で、主に写真のプロやマニアを対象とした商品だった。中でも取り扱量の多かったのがプロアー・ブラシで、これは十年余り前に創業者の佐野社長が考案開発したものだと後に啓司は聞かされた。

工場内での作業は、製造委託している業者から納入された種々の半製品を検品し、組み立て、そして梱包することだった。いずれも誰にでも出来るような単純な作業で、啓司はすぐに仕事にも慣れた。的確に不良品を見抜いて撥ねることができたし、仕事を進める手も早かった。そんな啓司の仕事ぶりは直に周囲から高く評価

されるようになった。

入社して一ヶ月余りが過ぎ、五月の連休が明けて間もないある日、遠藤先生がひよっこ啓司の職場に姿を現した。終業間際の頃で、社長に伴われて二階の作業場にやって来た先生は、作業台の端でブロー・ブラシの箱詰めをしていた啓司に近づいて来ると、仕事を終えたら本社に来るようにと言った。

程なくして終業のチャイムが鳴った。啓司は作業台を片づけ、着替えを済ませると、一階に下りて行ってタイム・カードに打刻した。そして、「今日は一緒に帰れない」と書いたメモを静香に渡して事務所を出た。

工場前の道を渡り、狭い路地を進んで本社ビルの事務所に行くと、遠藤先生がソファアに座って待っていた。先生の向かい側には、五十歳くらいと思われる恰幅の好い見知らぬ男が座っていた。啓司はソファアに近づいて行くと二人に一礼した。

「どうだ、元気でやっているかい？ 今日だね、ちよっと様子を見に来たんだ」

遠藤先生はそう言うのと、向かい側の男を啓司に紹介した。

「こちらは公認会計士の井沢先生」

「井沢です。富沢君は真面目で優秀な人だって、

佐野社長が褒めていましたよ。さすが遠藤先生の教え子だ」

井沢先生は低く野太い声で言った。

「彼はね、英語がよくできるんですよ。しかし、私の教え子なのに数学が苦手だね」

遠藤先生はそう言うて笑った。

「不肖の弟子で申し訳ありません」

啓司はただただ恐縮するばかりだった。

それから三人は本社事務所を出ると、春日通りまで歩き、タクシーを拾った。行き先は錦糸町駅北側の太平町。タクシーが着いた先は、古い住宅街の中の小ぢんまりとした鮎屋の前だった。

暖簾を掻き分け、格子戸を開けて店内に入ると、三人は奥のテーブル席に陣取った。

「啓司よ、君はビールなら少しくらいは飲めるんだろ？」

遠藤先生は、おしぼりで手を拭きながら、そう尋ねた。

「はい、少しくらいなら……」

啓司は躊躇いがちに応えた。これまでに酒を飲んだことがないわけではなかった。しかし、先生の前で酒を飲むのは、やはり何となく気が引けた。

「いいんだよ、気にしなくて。男は酒くらい飲

めなくちゃいけない。今日は私が特別に許可するから」

遠藤先生は上機嫌でそう言うのと、カウンター奥にいた大将にビールを頼んだ。

程なくしてビールが運ばれてきて、三人はグラスの縁を軽く触れ合わせて乾杯した。遠藤先生も井沢先生も一杯目は一気に飲み干した。啓司も真似をして一気に飲み干そうとしたが、半分ほど飲んだところで少し噎せた。飲み慣れないビールは啓司にはやはり苦かった。

「どうですか、富沢君、会社で何か困っていることはないですか？」

井沢先生は掴んだビール瓶を啓司の方に差し向けながら尋ねた。

「大丈夫です。今のところは特に何もありません。皆さん親切で、いい人ばかりですから」

啓司はグラスを差し出し、井沢先生のお酌を受けながら応えた。

「佐野商会はね、今はまだ小さいけれど、これから必ず伸びていく会社ですよ。社長は富沢君のような若くて優秀な人材を欲しがっています。このまま富沢君が会社に残ってくれたらなんてね、言ったりしてますけど」

「はあ、有難い話ですが……」

「まあ、そうだよ、まずは大学に入ることが

先決でしょうからね」

井沢先生は笑いながらそう言って、次に話題を転ずるべく、遠藤先生に話しかけた。

「遠藤先生、フェルマーの最終定理の証明の方は進んでいますか？」

「いやいや。なにしろ三百年以上経っても未だに解けていない大問題ですからね、そう簡単な話じゃありません」

遠藤先生は担当する数学の授業中にも時々フェルマーの最終定理の話をしていた。先生が秘かにその定理の証明について研究していることは啓司も知っていた。しかし、知識のない啓司には、それがいかに複雑で難解かは知る由もなかった。

「……すべての楕円曲線はモジュラーであるという予想、〈谷山—志村予想〉と言うんですが、これが十五年ほど前に発表されましたね、この予想が証明できれば、フェルマーの最終定理の証明にもかなり近づけるのではないかと私は思っているんですよ。そこで、今はその〈谷山—志村予想〉の証明に取り組んでいるところですよ」

数学の話をしている時の遠藤先生は実に楽しそうだった。

「フェルマーの最終定理の証明ができれば、賞

金が貰えるんですよ？」

井沢先生は尋ねた。

「そうなんですよ。十万金マルク」

遠藤先生が答えた。

「早く証明してくださいよ。賞金もらって、それで一杯やりましょうよ」

井沢先生はそう言って豪快に笑った。

受験生たちの間では「四当五落」などという言葉が真しやかに言われていた。受験勉強中の生活において、一日の睡眠時間が四時間なら合格でき、五時間なら不合格になるという意味だが、真偽のほどは別として、とにかく人より余分に勉強して切磋琢磨せよという、一種の根性論には違いなかった。しかし、当の受験生にしてみれば、勉強時間の確保は切実な問題で、その時間が多ければ多いほどよいとは誰しもが思っていたはずだ。実際、啓司自身もそんな呪縛に囚われていた。だから、一日の半分近くを仕事と通勤とで拘束される啓司の場合、勉強時間を多く確保しようとするれば、その分どうしても睡眠時間を削らざるを得なかったのだ。

家族の寝静まった深夜、一人ラジオを聴きながら机に向かって勉強していると、啓司は時々

高校時代の友人たちのことを思い出した。友人たちの多くは浪人して、予備校に通っていた。従って、彼らは啓司の倍以上の時間を勉強に費やすことができていたわけだ。そんな彼らが啓司には羨ましく思えることもあった。

そして、ラジオに接続したイヤフォンから不意にフランソワーズ・アルデイの囁くように歌う〈もう森になんか行かない〉が聞こえてくると、啓司は静香のことを思い出してはしばし心を慰めた。フランソワーズの囁くような歌声は啓司には静香の優しい声音を思わせた。

「……あたし、啓司くんの勉強の邪魔になっていたりしない？」

ある日、会社からの帰り道で、静香はそんな風に啓司を気遣って尋ねたことがあった。

「ぜんぜん、そんなことはないさ。むしろ、今は支えになっっている。ほんとだよ」

啓司は即座に否定して、言葉を継いだ。

「うん、それならいいんだけど……」

「俺、大学に落ちて、失意のどん底でシズちゃんに出会った。出会えてよかったと思っただけだよ。だから、感謝している。シズちゃんがいるから、頑張ろうと思っただけだよ」

「あたしね、もちろん啓司くんが大学に受かってほしいと思っただけ。でも、あたしが啓司

くんの勉強時間を奪っているとしたら、このままお付き合いしていいのかと思って……」

「悩んでいるわけか？ シズちゃん、俺はこう見えても結構意思の固い男だ。時間管理はちゃんとできる。こうしてシズちゃんと一緒に過ごす時間もスケジュールのうちさ」

「うん。でも、あたしと一緒にいる時間を勉強時間に振り替えられたら……」

「いや、そこまで切羽詰まっちゃいない。それに、やっぱり気分転換も必要だろ？」

「気分……：転換か……。啓司くん、あたしにとつては全然気分転換なんかじゃない！」

静香は、急に道端で立ち止まると、多少怒気を含んだような調子で言った。そんな調子で静香が話すのを見たのは啓司には初めてのことであった。

「あたしにとつては、啓司くんと過ごす時間がつつても大切なんだから。全然気分転換なんかじゃない。わかっちゃいないのよ、啓司くんには、あたしの気持ち……」

啓司は当惑しながら静香に向き合った。そして、静香の顔を見つめると、大きな目にうっすらと涙が滲んでいるのに気がついた。

啓司にはどう言葉を返してよいかわからなかった。静香をギュッと抱き締めてやりたいと

思ったが、人通りの絶えない路上でそんなことをする勇氣は啓司にはなかった。代わりに探るようにして静香の手をそつと掴んだ。静香は繋いだ手に力を込めて握り返してきた。

二人は手を繋いだままゆつくりと駅の方に向かつて歩きはじめた。

「啓司くん、あたしと過ごす時間はやっぱり気分転換でしかないの？」

「ごめん、シズちゃん。気分転換と言ったのは軽率だった。俺にとつてもシズちゃんと過ごす時間は貴重だよ。これは嘘じゃない。決して軽んじているわけじゃない。シズちゃんは今の俺にとつて特別な人だから」

「ほんとはね、あたし、啓司くんともつとずつと長い時間一緒にいたいと思っているの。だけど、啓司くんには勉強も大事だもんね。啓司くんには是非大学に合格してほしい。でも、そう思っただけでも、もつと啓司くんと一緒にいたいという気持ちもあるの。矛盾しているでしょ？ わかっているのよ。だから、つらいのよ」

「……：わかった。シズちゃんの気持ちはよくわかったよ。ありがとう」

啓司は、そう言って、繋いでいた手に力を込めた。

「そうだ、シズちゃん、今度の日曜日にデート

しないか？」

「デート？ 時間は大丈夫なの？」

「なあに、一日くらいなら問題ないさ」

「ほんとに？」

「ほんとさ」

「わーい、やったあ！」

静香の顔に笑いが爆ぜた。まるで子どものように静香は喜びを露わにした。

御徒町駅が近かった。二人の姿は雑踏に飲み込まれるようにして夕暮れの駅の構内に吸い込まれていった。

梅雨入りして間もない日曜日の横浜、山下公園。意外にも空は晴れて、昼前から強い陽射しが照りつけていた。

「あたしね、デートするの初めてなんだ」  
マリンタワー近くのベンチに座って、リアカーの屋台で買ったアイス・クリームを舐めながら静香は言った。それを聞くと、啓司は首を傾げて静香の顔を見つめた。

「ほんとだよ。あたしの通っていた高校は女子校だったの。それに、お父さんが厳しい人で、門限が六時ってきめられてた。だから、ボーイ・フレンドなんてできなかった」

「門限が六時って、そりゃ厳しいな」

そう言うって、啓司は手に持ったアイス・クリームをペロリと舐めた。

正面に氷川丸の大きな船体が海面に浮かんでいるのが見えた。きらきらと輝くその海面の先には川崎の工場地帯が見えていた。

「啓司くん、話を逸らそうとしてる？」

「いや、正直な感想を言ったただだよ。話を逸らすだなんて……」

「あのね、あたしが言いたかったのは、こうしてデートするのは、あたしにとつて初めての経験だということ。つまり、あたしの初デートの相手は啓司くんということよ。ちゃんと覚えておいてね」

「シズちゃん、怒ってる？」

「いいえ、ぜんぜん。あたしね、今日ほとつても幸せなんだ。こうして啓司くんからまるまる一日時間を貰えたから」

「門限は？」

「嫌なこと思い出させないですよ。大丈夫よ、あたしはもう高校生じゃないんだから」

「シズちゃん、垂れる！」

啓司が急に声を上げた。静香の持つアイス・クリームが融け、コーンの先端に滲み出して雫ができていたのだ。啓司は咄嗟に掌を出してそ

の雫を受け止めた。危うく静香のスカートに落ちるところだった。静香は慌ててコーンの先端を口に含み、融けたアイスを啜った。

「啓司くん、ありがとう。このスカート、今日のために用意したおニューなの」

そう言うって静香はスカートの膝の辺りをつまんで見せた。それはモス・グリーンのマキシ丈のフレア・スカートで、そのゆつたりとしたシルエットは細身の静香によく似合った。

「そのスカート、とつてもいいね」

「ありがとう。啓司くんそのベルボトムGパンも素敵よ。花柄のプリント・シャツによく合ってる」

「これでもう少し髪が伸びたら完璧かな。ナウいヒッピー・スタイル」

「もつと髪が伸びたら、童顔の啓司くんは女の子になっちゃうよ」

静香はそう言うって笑った。そして、躊躇いがちに啓司に尋ねた。

「……あのさあ、ひとつだけ訊いてもいい？」

「何さ？」

「啓司くんの初デートはいつだった？」

そう訊かれて啓司は答えに詰まった。

「……忘れた」

さんざん考えた末に啓司はそう答えた。

「そうか。つまり、以前にも付き合っていた子がいたってことね」

「うん、まあ……。でも、それは中学二年の時のことだよ」

「あら、忘れたって言ったくせに」

「うん、今思い出したんだ。でも、もうその子とは別れた。ほんとだよ」

「ふうん、中学二年って、さすが啓司くん。その頃からモテてたんだ」

「シズちゃん、怒ってない？」

「ううん、怒ってないわよ。過去は過去。今は啓司くんがあたしの傍にいてくれる。それだけであたしは充分幸せだよ」

静香はそう言うって肩を寄せてきた。

昼が近かった。昼食の前に船が見たいと静香が言うので、それでは大栈橋に行こうということになり、二人は大栈橋の方へと向かった。

栈橋に着くと、白い大きな客船が二隻停泊しているのが見えた。そのうちの一隻がエンジン音を響かせて出港を待っているようだった。

程なくして、その白い大型客船は汽笛を長く鳴り響かせると、ゆっくりと滑るようにして栈橋を離れて行った。(つづく)